

The Cambridge Gazette (V. 3)

Personal Letter to Mr. Sato (尊敬する佐藤泰男氏にお送りする私的通信文)

『ケンブリッジ・ガゼット (V. 3): 長目飛耳樹明編』
第 30 号 (2011 年 2 月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

一に曰く、長目(チョウモク: 遠方のモノを見通すこと)、二に曰く、飛耳(ヒジ: 遠方の事柄を聞き取ること)、
三に曰く、樹明(ジュメイ: 明察力を具えていること) 『管子』より (松陰先生の『飛耳長目』を倣って…)

今月号の目次

1. 日本で綴ったケンブリッジ便り
2. 情報解説
3. 編集後記

1. 日本で綴ったケンブリッジ便り

東京で1月下旬まで過ごすことにした。従って日本で綴ったケンブリッジ便りを佐藤泰男氏に謹んでご報告する。さてケンブリッジ市の北部にボロボロの建物が在る—その名も“Tokyo Restaurant”。ベルモントやコンコード等ボストン郊外の瀟洒な住宅街に繋がる道路の側に在るので嫌でも目に入る。日本の或る友人は筆者に向かい、「恥ずかしいから看板だけでも取り外してくれれば…」と語った。筆者がこの“Tokyo Restaurant”に行ったのは、1989年と2003年の2回。1989年、本校で「フォーラム」と呼ばれる会合で筆者の或る友人が講演をした後、日本の留学生や研究者、約30人が集り派手な宴会を開いた。2003年、久しぶりに友人と2人で鍋料理を楽しもうと入ったが閑散としている店内に驚き、会話も殆んどせずに食事を終え早々に退散した。海外から観れば、3回目の日本の「失われた10年」が始まったかに映る今、「日本がこの廢屋である“Tokyo Restaurant”の様にならないか」との懸念が杞憂に終わることを願って止まない。

2. 情報解説

昨年末ワシントンで、また年初にニューヨークで友人達と面談し、多くを学ばせて頂いた。ワシントンでは国際通貨基金(IMF)の徳岡喜一氏と日本の国債問題について意見交換し、

またジョージ・ワシントン大学のヘンリー・ナウ教授の邸宅に泊まった際に日米関係や中国の将来に関する情報交換をした。小誌昨年1月号でも触れたが、ナウ教授は日米韓3カ国間の国会議員交流プログラム(Legislative Exchange Program (LEP))の関係で毎年冬に東アジアを訪れる。が、昨年同様、米国連邦議会の日程が急遽変更されたため、未だにLEPの予定が決まらないとの事だった。教授からは日米関係に関する見解を伺うと同時に昨年中国人民解放軍(PLA)の将官の前で講演をした時の様子を伺い大変参考になった。ニューヨークでは、国連安全保障理事会に設置された「対北朝鮮制裁に関する専門家パネル」の委員として昨年11月からご活躍の早稲田大学の山本武彦教授と、美味しい日本料理と美酒を楽しみつつ様々な話で盛り上がった。

1月12日に東京に到着した翌13日、筆者所属のAsh Centerのジェイ・ローゼンガード氏が、キャノングローバル戦略研究所(CIGS)主催の会合で“Keynes versus Hoover: Finding the Path to Prosperity amidst the Ruins of the Global Economic Crisis”という題目で講演した。会合には(a)本学でアジアの将来を語り合う定期的会合(Asia Vision21 (AV21))の日本側代表メンバー、政策研究院大学(GRIPS)の黒川清教授や日本エネルギー経済研究所(IEEJ)の十市勉専務理事、また(b)本学で様々な形でご指導頂いた元空将、双日の永岩俊道氏、そして(c)関西経済同友会と本校との会合の際にお世話になった日本総研の廣瀬茂夫氏や伊藤忠商事の的場佳子女史、更にはCIGS内からは福井俊彦理事長や堀井昭成特別顧問等が参加して下さり、筆者としては大変満足した知的情報交換の機会となった。その夜は元Ash Centerフェロー、日本銀行の福本智之氏が加

わり、ローゼンガード氏と専門的な議論を更に深められた事も喜んでいる。またこの会合の場で、1月3日に本校で発表した論文—Ash Center フェローとして滞在した日銀の東善明氏と共に中国経済の現状と将来に関して論じた小論“Examining China’s Local Government Fiscal Dynamics: With a Special Emphasis on Local Investment Companies (LICs)”—を参考資料として配布した。この論文に対し、昨年12月16日に本学と縁の深い中国専門家が集まった際に面談したノースウェスタン大学のヴィクター・シー教授や、日銀の福本氏等から貴重なコメントを頂戴し嬉しく思っている。また中国経済の専門家、専修大学の大橋英夫教授からは、筆者が中国の国家目標(「全面建设小康社会」)の「小康」に言及する際、鄧小平が『詩経』や『禮記』を念頭にして近代化を考えた事を脚注に記したのを発見して「栗ちゃんらしい愛嬌」というコメントを頂いた(1999年から約2年間、大橋教授と四半期毎に中国を訪れたが、その際書店に立寄ると大橋教授は現代政治経済の文献・資料を、筆者は中英2カ国語版の『四書五経』や『唐詩選』等古典ばかりを購入していた事が懐かしい)。

東氏は1月中旬に日銀に戻られたが、約4ヵ月間、彼と共に過ごしたAsh Center時代は思い出深い。前号に記した12月6日の本校China Club主催の会合でも、唯1人出席した日本人として筆者の講演とそれに対する中国人の反応を客観的に観察して頂いた。そして講演後、東氏は、「栗原さん、5年後、北京を訪れ中国語で講演をなさったら、(2人共通の知人である)外交部の姚遥氏や商務部の傅自応副大臣がきっと喜びますよ」と筆者をおだててくれた。と同時に前号で触れた清華大学の「優秀クン」と3人で飲んだ時には「今度3人が北京で飲む時にはジュンが中国語を話さない限り、彼にはお酒を飲まさないでおこう」と筆者に猛烈なプレッシャーを(勿論、良い意味で)かけてくれた。日本の俊英、東氏の明るい将来に期待すると共に彼から受けた知的刺激を大切にしたいと考えている。

月日は遡って12月26~27日、2日連続で、本学欧州問題研究所(CES)の友人達のうち、休暇中に帰国しなかった人々が開いたパーティーに参加した。本学に居る欧州の人々は元来アジアに関する知識が浅く、筆者に対する質問も「切り口」が大胆で楽しめる(同様に本学に居るアジア人の欧州観は新奇である)。その時、中心となったアジアの話題は次の2点—①嘗ては燦然と輝いていた日本が今どうして輝かず、中国にアッサリと経済大国第2位の地位を譲ったのか?、と②中国の台頭に対し、日米欧が出来る事は何か? 以下に欧州の友人達との会話の一部を紹介する。

①に関し、筆者が昨年11月28日付『日本経済新聞』の記事「消えるグローバル人材: 語らぬトップ、内向く若者」を基に話をした。

(a)産業能率大学の昨年の新入社員意識調査で、「海外では働きたくない」比率は49%に達したという数字を紹介すると、或るフランス人が「ジュン、どこが変なの? どの国でも国内で働きたいと思うのが大多数で、エリートだけが国際感覚を持っているのでは?」と不思議そうに話した。そして「問題なのは今のエリートの国際感覚」がその場の多数派の意見となった。筆者が、欧米列強が暗躍する19、20世紀の国際社会で奮闘した日本のエリート—伊藤博文、陸奥宗光、小村寿太郎、吉田茂等—の話を彼等にすると、「たとえ一握りの少数派であっても、日本のエリートが国際感覚に優れていたからからこそ、明治維新や第2次世界大戦後に輝く日本を創り得たのでは?」と皆が鋭い質問を筆者に向けた。筆者もそれに応え「確かに。中国も少数派だが周恩来が青年時代に日本と英仏両国で、また鄧小平が青年時代にフランスで生活して体得した国際感覚が現代中国の発展に大きく寄与している」と述べた。その時、或るドイツ人が「ジュン、今の日本は?」と聞くので筆者は、偉大な歴史学者ランケの名著『世界史概観(*Über die Epochen der neueren Geschichte*)』に言及しつつ論じた—「君の国の大学者は『絶対的な進歩、確実なる量的増大は、物質的な関心領域において認めることが可能。… が、道徳面

で進歩を追求するのは不可能(Ein unbedingter Fortschritt, eine höchst entschiedene Steigerung ist anzunehmen, so weit wir die Geschichte verfolgen können, im Bereiche der materiellen Interessen, . . . in moralischer Hinsicht aber läßt sich der Fortschritt nicht verfolgen.)』と語った。即ち優れた『ヒト』は必ずしも年を追う毎に増えたりはしない。君の国でも凡庸なヴィルヘルム II 世がフリードリッヒ大王の素敵な館『Sanssouci』の隣に建つ『新宮殿(das Neue Palais)』で『第 1 次世界大戦の宣戦布告(die Kriegserklärung zum I. Weltkrieg)』に署名し、鉄血宰相ビスマルクが巧みな外交で構築した国際システムを完全に破壊したじゃないか?』と。そして筆者は、ランケが同書を著した 1854(安政元)年に我等の松陰先生が残した『幽囚録』を思い出していた—「徒(いたず)らに二百年前の遺制を恃(たの)み、… 危ふからずや。… 宜しく兵學校を興し、諸道の士を教へ、… 方言科を立てて荷蘭(オランダ)及び魯西亜(ロシア)・米利堅(メリケン(米国))・英吉利(イギリス)諸國の書を講ずべし。… 我が邦の人乃(すなは)ち其の方言を詳(つまび)らかにせずして可ならんや」、と。外国語を「方言」と呼ぶところは、流石は熱血的愛国主義者の松陰先生であるが、「(19 世紀版の)グローバル時代には旧弊固陋な制度を刷新し、日本の俊英は外国語をマスターすべし!」という先生の見解は今尚新鮮だ。

次に(b)小誌 2003 年 8 号で触れた日本国際交流センターの山本正理事長が日経の記者に語ったコメントを紹介した—「日本の官も民も、対外的な情報の発信や国際交流の促進に長期的な視点での投資をしていない。外国の人と意見を交わす機会を増やしたり、そういう訓練の場を重ねたりすることに、おカネを投じてこなかった」や「巨額の予算を必要とするわけでもないのに、国として情報や意見を対外発信する意識や機能が弱くなった。国際的なシンクタンクの整備も進んでいない」、と。すると或るオランダ人が突き放したような発言をした—「グローバル時代の到来を日本の指導者は未だ正確には理解していないの

だね。国際的知的対話を長年しているにもかかわらず、日本の指導者の多くは英語が苦手のまま。やはりグローバル化の進展を皮相的にしか理解していないのだ」、と。

これを聞き再び嘗ての日本のエリートが経験した奮闘と挫折の歴史を友人達に紹介した—元々尊皇攘夷の志士だった伊藤博文は、1863 年に「長州五傑」の 1 人として英国留学をした結果、彼我の実力の差を自身で体感する。それが故に居居丈高な欧米列強と国際感覚が希薄な長州藩との無益な争い(長州戦争)を阻止しようとしたが、その努力は空しいものとなった。また第 1 次大戦後、日本がパリ講和会議で欧米列強と同じ地位に漸く辿り着いたものの、牧野伸顕全権次席は最初、傲慢不遜なクレマンソー首相から「あのチビは何と言ったんだ?(Qu'est-ce qu'il dit, le petit?)」とまで言われた。が、珍田捨巳全権と共に山東問題や南洋群島の委任統治問題で粘り腰の交渉を行い、2 人に対する賞賛を欧米側の歴史書にも記録させた。しかし、その日本も太平洋戦争で惨めな敗戦を経験し、再び牧野を失意の淵に追いやった。牧野の孫娘で吉田首相の令嬢、麻生和子女史は、小誌昨年 11 月号で触れた著書『父 吉田茂』の中に牧野が敗戦直後に漏らした言葉を記録している—「折角、我々が苦勞してここまで創り上げた国をこんなにしてしまつて」、と。こうして松陰先生をはじめ日本の先輩諸氏の苦勞を紹介し、同時に現在でも多くの日本人が奮闘しているが、グローバル化の勢いはそれを上回っており、「今、じたばたしても仕方が無い」と語った。そして尊敬する開高健氏の言葉「悠々として急げ(原典はラテン語の *festina lente*)」、更には「急いては事を仕損じる(*festinatio tarda est*)」を傍らに今年はずっと腰を落ち着け、長期戦略を練ることにしたと語った次第だ。

②の「中国の台頭に対し如何なる形で日米欧は取り組むのか?」だが、政治経済社会、更には地球環境の問題で、中国との協力が無視出来なくなった事は自明だ。小誌前号で触れた様に米国のインテリで少数派となった「知日派」・「親日派」の 1 人、ジョセフ・ナイ教

授ですら、息子さんが中国人を養子にして「知中」・「親中」になりつつある。そして MIT のマイケル・クスマノ教授や本学のリチャード・クーパー教授もご夫人が中国人であるから当然「親中派」であろう。また本学を中退した“Facebook”の天才、マーク・ザッカーバーグ氏の girlfriend も中国系だ。こう考えると 21 世紀の世界が抱える最大の課題の 1 つが、「内外で激しい動きを示す中国と如何に付き合っていくのか」である事を誰も疑うことはしまい。しかも日本は地理的にも歴史的にも近いが故に、その交際術の「巧拙」が大きな差を生み出してしまふ。

(a) 先ず CES の友人達は①の問題とも絡め、日本の「知的情報発信能力」の拙劣さを指摘した。そして古代ローマのホラーティウスの『詩論(Ars Poetica)』の中の言葉“nescit vox missa reverti (A word once uttered cannot be turned back).”に触れ、言葉選びの大切さと同時に思慮なき発言の恐ろしさを語った。それに応えて筆者は中国古典『貞観政要』の中の言葉を紹介した—「言語は君子の枢機なり。談、何ぞ容易ならん。凡そ衆庶に在りても一言善からざればすなわち人これを記し、その恥累を成す。況(いわん)やこれ万乗の主をや(言語は君子の最も枢要な部分だ。人と談じる事ぐらい難しいものはない。そもそも庶民の間でも相手の気に障る言葉を一言でも言えば、相手はそれを憶えていて仕返しをするものだ。ましてや万乗の君主をや、だ)」、と。加えて尊敬する外山滋比古先生のご著書『人に聞けない大人の言葉づかい』の中の言葉も紹介した—「人は言葉で生きる。言葉が無くては生きられない。人間は言葉次第である。『文は人なり』という、よく知られた言葉であるけれども、より広くそして深い意味において『言葉は人』ということができるように思われる。人を知るには何よりもまずその人の言葉を見ればよい、というのは古くからよく知られていたことであって古くは『言葉は国の手形』という諺もある」、と(注: 筆者が若干変えている)。外山先生によるフランスの大学者デュフォンの言葉(Le style c'est l'homme même)の

引用に感激したフランス人は筆者に語った—「でも日本はアニメと料理でメッセージを伝えようとしているよね、ジュン」、と。

(b) 彼の正鵠を射た指摘には筆者も参ってしまった。確かに日本の“soft power”は小誌 2009 年 7 月号で記した通り、(i)食文化、(ii)善良で礼儀正しい庶民、(iii)時間に正確な鉄道網に偏在しており、日本人エリート of 国際的「知的情報発信能力」の欠如は明白だ。翻ってナイ教授は米国の“soft power”を語る際、時折“From Harvard to Hollywood”という表現が使われる。即ち本学等の高等研究教育機関という high culture からハリウッド映画という pop culture まで、層の厚いのが米国の“soft power”だと仰っているのだ。この意味で筆者が尊敬する企業人、日本電産(Nidec)の永守重信社長のご発言—「経営者は発信せよ」に共感を覚えている(『日本経済新聞』昨年 7 月 28 日付ブログ)。小誌では 2004 年 11 月号や 2005 年 5 月号等、時折、永守氏に触れてきたが、Nidec 本社で永守氏と面談後、尊敬する MIT のスザンヌ・バーガー教授が「ジュン、わざわざ京都まで甲斐があったわ!」と興奮気味に仰った時の筆者の喜びは今も記憶に新しい。歴史は遡るが小誌昨年 1、4 月号で触れた松下幸之助氏も国際的な知的情報発信に対する感覚が極めて鋭い。それは佐藤悌二郎氏の「訪米・アメリカは松下経営哲学にどのような影響を与えたか」等を読めば直ぐに分る。松下氏は商才に加え外国語にも鋭い感覚を持ち、訪米中「英語が判らないので時間がかかる」事を痛感し、「青年社員の訓育に語学力を採り入れ」るよう、松陰先生と同じ考えを懐くに至った。加えて松下氏はカール・スクリーバという南カリフォルニア大学(USC)で学んだドイツ国籍の有能な「ヒト」を戦前から通訳として巧みに使った。その御蔭で敗戦後に占領軍から受けた聴き取り調査の時も、また 1952 年秋のフィリップス社との技術提携の際も迅速で見事な対応を見せている。

(c) 言葉は真に大切だ。本学の新聞 Harvard Gazette 紙も、昨年 11 月 2 日付記事“Change Languages, Shift Responses”の中で言語と思

想・態度との関係を論じたが素人の筆者に理解出来たのは「何を言うか(what to say)」と「如何に言うか(how to say)」には深い関係が有り、これは数学や物理学或いは芸術や調理そしてスポーツを除いて真実だという事だ。また昨年 12 月号で触れた東京大学の斎藤兆史教授のご著書の中に意味深長な表現がある—「英語のできない学生は、まず例外なく日本語の表現力が乏しい。わけの分からない英語を書いたり話したりする学生に、言いたいことをまず日本語で表現してごらんという、そもそもその内容が漠然としている。表現したいことが日本語でも整理できてない」、と。即ち「知りたい事」や「伝えたい事」が曖昧だから操る言葉も曖昧で好い加減なのだ。

が、これは日本に限った事ではない。20 世紀初頭、凋落が明白となった英国にも該当した。以前、筆者は英国の友人に向かって言った—「大英帝国の衰退期、勿論例外は有るが東洋に居た英国人は二流ばかりが目立っていた。作家のモームは或る小説(*On a Chinese Screen* (1922))の中で“*He had been in China for thirty years, and he prided himself on not speaking a word of Chinese. He never went into a Chinese city*”と語り、また(小誌で何度も触れたオーストリアのジャーナリスト)ロスは、『新しいアジア(*Das Neue Asien*) (1940)』の中で『*彼等(二流の英国人)は 10 年、20 年、30 年と中国に住んでいるが中国語の一語さえ学ぼうとしない(Sie leben zehn, zwanzig, dreißig Jahre in China und bemühten sich nicht, auch nur ein Wort Chinesisch zu lernen.)*』と語った」、と。戦後日本も国際環境の重要性を真剣に考えなくても許されてきたが故に言葉も曖昧だったと言える。換言すれば「伝統」・「権威」を妄信し、「巧緻な術策」を弄することに専心するだけで「論理」を重視しなかった報いから、日本は一時的な思考停止状態に在るのだ。だから「グローバル時代」と単純に叫んでみても無意味だと判断し、冒頭の“Tokyo Restaurant”を想い浮かべ、今は“festina lente”と気長に戦略を練っている。

3. 編集後記

以上で *Cambridge Gazette* (V. 3)、長目飛耳樹明編第 30 号を締めくくる。20 年前、32 歳の筆者はハイテク貿易摩擦に関する或る会議の準備を仰せつかった。相手はホワイトハウスの元上級スタッフやシンクタンクの研究者達。不思議な事に直属の上司は英語も話せず専門知識も無い。直前になり、さすがに怖気付いたのか、上司は当日の朝まで約 1 週間「連絡不能の出張」をし、大変な思いをさせられた。が、幸いハイテク分野の日本人専門家が出席したため米国側の知的好奇心を満たす事を辛うじて出来た。が、問題はその後だった。晩餐会に出席した日本人は筆者を含め 4 人—(a)社長は「国内純粋培養」のせいか、英語も外国人と接するマナーも全く知らない。(b)海外(London)赴任を経験した唯一の役員も、所謂 pidgin English で、天気と料理の初歩的な話しか出来ない。そして(c)経済担当の役員は Brookings Institution を「ブルックリン研究所」、「market volatility」を「マーケット・ボランティア」と言う始末だから慧眼な読者は会話の知的水準にご想像がつくであろう—身振り手振りが混じる雑談だが日本料理だけは超一流。或る米国人が早口の英語で「彼等は何も判ってないぞ!」と囁いたが、筆者以外の日本人は誰も聞き取れずニコニコしたまま。それ以後彼等が会話に興味を失ったのは当然で、その事を 20 年経た今も筆者は残念に思っている。

以上

栗原 潤	Jun Felix KURIHARA
ハーバード・ケネディ・スクール	Senior Fellow,
シニア・フェロー	Harvard Kennedy School (HKS)
キャノングローバル戦略研究所	Research Director,
研究主幹	Canon Institute for Global Studies
連絡先	
Mailing address: 79 JFK St., Ash Center, Cambridge, MA 02138	
Office address: 124 Mt. Auburn N235, Cambridge, MA 02138	
Tel: +1-617-384-7430; Fax: +1-617-496-4602	
Email: Jun_Kurihara@hks.harvard.edu; Kurihara-Jun@rieti.go.jp	
(日本での連絡先) 〒100-6511	
東京都千代田区丸の内 1-5-1 新丸の内ビルディング 11 階	
Tel: 03-6213-0550 (代); Fax: 03-3217-1251	
過去の <i>Cambridge Gazette</i> は全てネット上で見ることが出来、ダウンロードも出来ます。ネット上で「Google グループ」のウェブサイトに行き、そこで“Cambridge Gazette”と打ち込めば、 <i>Cambridge Gazette</i> が載せてあるサイトに導かれます。	